

石狩浜の寛永通寶加工銭



同表



同裏

いしかり
博物誌
132

寛永通寶の加工銭の謎

かん えい つう ほう

平成25年4月、石狩浜海水浴場西端で寛永通寶を一枚拾いました。表は錆で見えませんでした。裏返すと直径2ミリほどの穴がありました。銅銭ですから錐状のもので比較的簡単に開けることができたでしょう。

寛永通寶は寛永13(1636)

年から発行された、江戸時代の代表的な貨幣です。一文銭と四文銭があります。岡つ引きの銭形平次が投げるのが一文銭です。「茶の句に「小松菜の一文束や今朝の霜」と

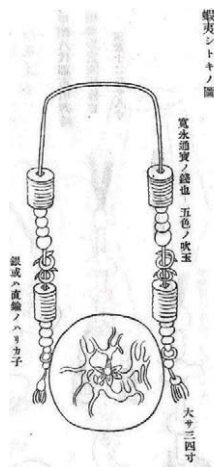
いうのがあり、一文で小松菜が買えたようです。

加工銭とは意図的に手を加えたものをいいます。小さな穴を開けるのもその一つです。これまで寛永通寶ではわずかに一例しかなく、千歳市のアイヌ文化の遺跡で出土したものが唯一でした。発掘の報告書を中心に探すと道東の別海町の通行屋(旅人のための公的施設)跡でもう一例見つかりました。例は増えましたが、石狩浜の例を加えても寛永通寶の加工銭

は道内で三例しか見つかりませんでした。加工銭はまじないなどの目的、また穴を開けたものはサハリンの少数民族の例から衣服の装飾に使用したなどの説があります。しかし、アイヌ民族の場合、寛永通寶はチシポ(針入れ)や首飾りに使っていますが衣服の飾りの例はないようです。千歳市の例から寛永通寶の加工銭がアイヌ社会で使われていたとみられますが、どう使われていたか不明です。

今年5月、道南の上ノ国町に調査に行つたところ寛永通寶の加工銭が見つかりました。穴を開けたもの二枚、中央の四角の穴を丸く削つた一枚です。

(石橋孝夫)



寛永通寶を使ったアイヌの首飾りの例



上ノ国町勝山館跡出土の加工銭

石橋 孝夫 Takao Ishibashi

専門分野は考古学と石狩史。石狩紅葉山49号遺跡の発掘を手がけたほか、縄文時代から江戸時代に至るサケ漁の方法や文化について研究する。



ERIS 「いしかり博物誌」は、えりすいしかりネットテレビ(<http://www.i-eris.tv/>)でもご覧いただけます。